

近代語における「如シ」の用法

羅 工 洙

キーワード ゴトシ 如ケレバの形成 カリ活用 訓読特有語 欧文

脈

要旨 比況の助動詞「ゴトシ」は近代になって、それ以前の時代にはなかった新しい用法を生み出している。それは、「ゴトケレバ」という活用形、「カリ活用」、翻訳に用いられた「用言連体形+か+の如く」の三つである。これらは恐らく江戸時代後期の漢文訓読の用法から生み出され、それが近代に引き継がれたものと考えられる。

一. はじめに

比況の助動詞「ゴトシ」は、漢文訓読語として位置付けられ今日に至っている。従来漢文訓読語と言われた用法は時代が下るにつれて、位相的対立を弱めていく傾向がある。「ゴトシ」もとくに近代になって古代に見られなかった様相をみせている。すなわち、近代における「ゴトシ」は、訓読文以外にも通俗文や和文にも深く浸透して、(1)、位相的な偏りがなくなってくるのである。

さらに、注目すべきは、近代における「ゴトシ」には、用法のうえでも広がりが見られる点である。古代に存在していなかった新しい用法が生まれてくるのである。そうした傾向は漢文訓読の世界のみならず、欧文を翻訳する際にも認められる。

本稿では「ゴトシ」の新しい用法が、どのような時代的背景から生まれたのか、とくに前時代である近世との関わりがあるのかどうかを中心として、文章史的観点から考察しようと思う。

以下では、漢文訓読文における已然形「ゴトケレバ」、形容詞的用法である「カリ活用」、また西洋の文章を翻訳する際にできた「用言連体形+か+の如く」の三つの語形を取り上げ、その背景について考察していこうと思う。

二. 已然形「如ケレバ」の形成

ゴトシの活用は「ごとく」「ごとし」「ごとき」の形で、この3形が主として用いられている。他に未然形には「ごとけ」に推量の助動詞「む」がついた「ごとけむ」や「ごとく」に「ば」が付いた「ごとくば」がある。

この未然形は前代では仏典の訓点資料の中で使われて

きたが、明治の文語文にも用いられている。ところが、近代ではこの他に、已然形「ゴトケレ」に「バ」が付いた「ゴトケレバ」の形容詞的用法という新しい形が現われた。明治十七年に岡三慶の儒学書である『孟子講義』²⁾に、

- ① 其^レ如^ケケレバ、^レ是。孰^カ能^ク禦^シ之^ヲ。(梁惠王上)
- ② 曰^ク若^ケレ是、^レ則^ハ弟子之惑^ヒ滋^シ甚^シ。(公孫丑上)
- ③ 曰^ク若^ケレ是、^レ則^ハ夫子過^ル三^ニ孟^ニ貴^ニ一^ニ遠^シ矣。(公孫丑上)
- ④ 如^ケレ此、^レ則^ハ無^レ敵^レ於^ニ天下^ニ。(公孫丑上)
- の四つの例が本文で見られる。岡三慶はまた『孟子講義』の註釈「註・解・文法」の所でも多く用いているのである。この本の「如し」(是くの如しも含む)の総用例は五九三例であるが、その内二九例が「如ケレバ」として用いられている。

- ⑤ 夫^レ此^ノ如^ケケレバ、^レ則^チ人民四十里ヲ以テ大ナリト為スモ、^レ(卷二二一才)
- ⑥ 而^レ斥^レ此^ノ如^ケケレバ、^レ其意洗濯ニ過ギ、人ヲ驚カスニ足ラズ(卷一三十七才)
- ⑦ 大王ノ為ス所ノ如^ケケレバ、^レ王政ヲ行フニ於テ何ノ妨害カ之^レ。(卷二五十八才)
- ⑧ 此二句ハ譬ヘバ雪中ノ龍ノ如^ケケレバ(卷三二一才)

ウ)

- ⑨ 熱ル、者ノ火益熱アツキ)カ如^ケケレバ、嘗テ君王ノ師ヲ(卷二七十六ウ)

右のように使われているが、「此ノ如ケレバ」以外に体言や用言に付いている用法も見られるのである。

- このような訓法は何時から生まれたのだろうか。右の①②③④の例を江戸時代末の儒学者の訓点である「後藤点」「日尾点」「一斎点」の『孟子』と比較してみると次の通りである。

- 一、①若^クハ^レ是、^レ孰^カレ^カ ②若^クハ^レ是、^レ則^チ若^クハ^レ是。
- 則^チ④如^クハ^レ此、^レ則^チ(後藤点)
- 二、①若^クハ^レ是、^レ孰^カレ^カ ②若^クハ^レ是、^レ則^チ若^クハ^レ是。
- 則^チ④如^クハ^レ此、^レ則^チ(日尾点)
- 三、①若^クハ^レ是、^レ孰^カレ^カ ②若^クハ^レ是、^レ則^チ若^クハ^レ是、^レ則^チ
- ④如^クハ^レ此、^レ則^チ(一斎点)

右の例から分かるように「是ノ如ク(ン)バ」「是ノ如キ寸ハ・此ノ如クナル寸ハ」「是ノ如キハ」と同じ箇所を諸学者により種々の読み方をしている。『孟子』では「ゴトケレバ」のような訓法が見られない。そこで、江戸時代の儒者の文献を調べてみよう。管見によれば佐藤一斎が用いているようである。彼の著である『言志録』(弘化

三年・一八四六年)に次のような例が見られるのである。

⑩能^ク從^フニ庭訓。ニ如^{ケレハ}レ此^ノ則^ノ孝子之素願足^ル矣
(二八才)

⑪如^{ケレハ}レ此^ノ則^{不^メニ獨^ル勸^ルニ其孝弟^ヲニ而弁^セ以勸^ムニ其慈友^ヲ一(一八ウ)}

このように岡三慶が用いた「ゴトケレバ」は既に江戸時代の末に現われている。

ところで、この「ゴトケレバ」の形成には「則」が関与しているようである。つまり、佐藤一斎と岡三慶の例文からうかがわれるように「如此・如是」の次に「則」の字があることが分かる。

「則」*4字に関する訓読語法の変遷については、小林芳規氏(2)、鈴木直治氏(3)、村上雅孝氏(4)、斎藤文俊氏(5)等により既に研究されている。斎藤文俊氏は、「則」字が文中にある場合を『桂庵和尚家法倭点』と『点例』を参考にし、近世の論語読みの変遷を考察した。その読みは〈…トキハ則チ—〉の訓読法から〈…レハ則—〉という訓読法に変遷するが、その時期は、近世中期の山崎嘉点から本格的に〈…レハ則—〉が用いられ、後期まで続くと述べている。そうすると「如此則・如是則」の「カ

クノゴトケレバ」は「…レバ則—」のような読みの時代的影響により形成されたのではないかと思われる。

以上から明治期の「ゴトケレバ」は、江戸後期の漢文訓読の世界からの影響であることが考えられる。それは「則」字の補読が「トキハ」から「レハ・ラハ」へ変遷したことによるものである。

この已然形「ゴトケレバ」は生成されたものの、広く用いられるまでには至らなかった。明治期の翻訳小説である『禽獣世界狐乃裁判完』(明治十九年四月)(明治初期翻訳選「昭和五十三年雄松堂書店」)に、

⑫卑^{それ}臣^{がし}すら此^{わく}の如^{ごと}けれ^ば妻^{つま}へ直^{ひた}震^{ふる}へ^ふ震^{ふる}ひ怖^{おそ}れ終^{つひ}ふ
此^この時^{とき}より病^{やまひ}を得^えたり(三二六頁)

のような例が見られる。訓読文以外の文語文で稀に見られるが、それほど多くは用いられていない。普通の文章で(一部作品除外)で見られないのは一般化していない訓読特有の語法であったからであろう。

三、「如し」における「カリ活用」の登場

古代の訓読語には「如かり」という活用が存在していなかった。「如くなり」は「如くに」にラ変動詞「あり」が接続した(または「ごとく」に断定助動詞「なり」が

付いたとする説もある)もので、訓読語以外でも自由に用いられた。同様に連用形「如く」にラ変動詞「あり」が付いた「如くあり」があり、また「如きあり」という用法があつて各々活用をしているのである。固定された訓読語法では融合するまでには至らず、「如かり」の「かり活用」は成長していなかった。

五十嵐三郎(6)は「如し」の活用について、

形容詞の未然形を認めない説があることからすれば、「如く」という未然形は認める必要もなく、また「ごとし」は、「かり活用」の形式もない。しかし古い時代の形容詞の未然形で助動詞「む」に接続していく「け」の形「ごとけ」が平安初期、訓読語に存し、「ごとけむ」の形を見ることができ(傍線筆者)

のように述べている。このように「ごとし」においては「かり活用」がないということになる。

古典文法書をみると次の表の通りである。

未然形	連用形	終止形	連体形	已然形	命令形
ごとく	ごとく	ごとし	ごとき	x	x

※右の表は「如くなり」の活用は入れておらず、「如し」だけのものである(松村明編の『日本文法大

辞典』(7)には「連用・終止・連体」の欄しか見られない。研究論文には未然形に「如けむ」がみられる)

右の表からもこのことは確認できるように「かり活用」が存在していない。明治に入ってもこの形容詞的「かり活用」はあまり用いられていないが、一部の作品にその例が見られる。すなわち、明治三十年代に「高山樗牛」が論説(評論)文で用いている。

①一時馬琴の歴史小説の爲に壓倒せられ、明治に入りて辛く土を捲いて再来したるが如からずや(『明治の小説』明治三十年六月、現代日本文学全集59四七頁下)

②其の人物は、須らくベーコンの如く、…中略…坪内逍遙氏の如かるべし。(『姨崎調風に與ふる書』(明治三十四年六月)現代日本文学全集59七七頁中)

③彼等の其の道に就くや鳥の埒に歸るが如かりしのみ。(『美的生活を論ず』(明治三十四年八月)現代日本文学全集59九九頁上)

の例のような文語文に見られる。又、「である」調の筆述体にも見られる。

④ く大和民族の眞精神と心得、強ひて斯の如からんことを力めて居るものがある。「水野廣徳・『此一戦』(明治四十四年三月)明治文學全集97 三八頁上」

なお、時代が下って翻訳物にもその例が見られる。

⑤ く巉巖の屹立したさまはあたかも江に臨める石のきりぎしの如からしめた。(六五頁)

⑤ は沈復作、佐藤春夫・松枝茂夫訳の『浮生六記』(昭和十三年九月、岩波書店)である。「かり活用」は文語文やそれに近い文章に用いられたが、その用例は非常に少なく、広く用いられなかったのである。

このような「如かり」用法は何時生まれたのか。「日尾点」の『慶應新刻四書・孟子』(慶應三年、東北大学図書館蔵本)に次のような例が見られる。

⑥ 孟子ノ曰ク。舜ノ之飯糗^{クラヒ}茹^{ホシヒ}也。若^{カリ}若^{カリ}スルカレ將^ニ終^{ヘント}身^ヲ焉。「盡心章句下」

このように、「將ニ身ヲ終ヘントスルガ若カリキ」の「かり活用」が用いられているのである。このような例は他の資料では今のところ見られない。後藤点、一斎点では同じ箇所を次のように読んでいる。

⑦ 若^シスルカレ將^ニ終^{ヘント}身^ヲ焉。「盡心章句下」(後藤

点)

⑧ 若^レル將^ニ終^{ヘント}身^ヲ焉。「盡心章句下」(一斎点)
このように「若カリキ」のような訓法は見られない。管見では「日尾点」以外に見出だすことができないのである。

以上のことから「ゴトシ」の活用は近代には次の表のようになつていたものと考えられる。「如から(ん、ず、しめた)・如かり(き、し)・如かる(べし)」のように未然形・連用形・連体形が見られる。

未然形	連用形	終止形	連体形	已然形	命令形
ごとけ(シ)	ごとく	ごとし	ごとき	ごとけれ(シ)	×
ごとく(トス)	ごとかり		ごとかる		
ことから(ル)	ごと(キ)		ごと(キ)		

それまで存在しなかった「かり活用」が近世後期に生まれ近代でも引き続き使用されたのである。

このように形容詞的活用として認識され、「かり活用」が登場するが、終止形の「如かり」と命令形の「如かれ」は存在しない。終止形の場合は普通の形容詞の活用でも「カリ」終止はなく、「ク活用・シク活用」両方とも「シ」で終わる。このように見てくると、「如し」の場合は命令形「如かれ」だけが備わっていないことになる。近代に入つて「如し」の用法は広がりを見せてくるが、ある特

殊の世界だけに用いられたものと考えられ、広く一般的には広まることなく姿を消していくのである。

四・欧文脈における「ゴトシ」の用法

西洋の文典を翻訳する際、当初は漢文直訳体で書かれたのが大部分である。勿論、比況の助動詞の場合「やうなり」を使わず、「如し」が用いられた。この「ゴトシ」を用いたものに、欧文直訳体の表現と見られる「用言連体形+か+の如く(に)」がある。夏目漱石が『将来の文章』(明治四〇、一、一「学生タイムス」)の中で、

兎に角思想が西洋に接近して来れば夫に従って、眞似るではないが日本でも自然西洋の程度に進まなければならぬ。即ち今日の文章よりも、もつと複雑な説明法と廣い言葉とが生れねば叶はぬ。今でも「何々かの如く」など翻譯的方法が入って来て居るものも澤山あるが、中々これは便利である。今後もづんづん新しい方法が出来るであらう。(『漱石全集』第一六卷五五二頁岩波書店、傍線筆者)

このような欧文脈に見られる「用言連体形+か+の如く」の用法はこれまで見られなかった形である。いつか

ら用いられたか明らかではないが、前の「カリ活用」と同様に江戸時代後期から英和辞書にその用例が見られる。

as though, as if (スルカノ如ク) 『英和對譯袖珍辭書』文久二年江戸開板)

great though, -if カノ如ク 四頁 『英文熟語集全』

慶應四年尚古堂發兌)

as though カリノカノ如ク 七七頁(同右)

as though, as if カノ如ク (『英和對譯辭書』明治五年)

As though, as if (スルヨウニ) 『和譯英辭書』明治二年)

治二年)

As though, as if カノ如ク (『English & Japanese Pronouncing Dictionary』SHANGHAI AMERICAN PRESBYTERIAN MISSION PRESS 1871)

これらの例は英語の熟語を翻訳したものである。この中で、『和譯英辭書』には同じ所を「スルヨウニ」と解釈しているものもみられる。

明治初期の翻訳の文学作品などは殆どが「漢文直訳体」で書かれ、訓読的語法が用いられていた。次の例文をみてみよう。

ルール フナルスト エ サブスタ ンチフ	ザ ン ト イ ズ	Rule I.—A substantive that is
見則 第一ノ	廣名詞 ハ	其レハ アル (新)
主 ザ	主 ノ	主 ノ
the nominative case; as,	ケース ズ	格ニ 如シ
“Years come and go.”	イールス カム アンド グ	エ ン ド グ ー
“Lovest thou me?”	ローブスト ザウ ミー	ハ ミ ー

(戸田忠厚譯同蔵『英文典獨學』六十八〜六十九頁明治四年十二月)

ザ ン ジ ケ イ ケ グ	エ ン ド ポ テ ン チ ア	The indicative and potenti
直説法	及ヒ	許可法
al only; as,	ハ ニ オ ン リ ;	“shall false
フード トリム ト リム フ	フ ラ フ カ	偽リガ
hood triumph?	ケ ン ト リ ン フ	得ルカ
th perish?	ス ペ リ シ ?	指ト
ガ	ハ ニ オ ン リ ;	

(戸田忠厚譯同蔵『英文典獨學』四十九頁明治四年十二月)

この例文にみるように「余ヲ愛スルカノ如シ」「亡ビ得ルカノ如シ」といった「動詞連体形+カ+ノ如シ」が用いられている。また、「〜かの如く」は英語の熟語である「as if, as though」にあたるものであるが、例える箇所は殆どが「as」で、まれに「like」を用いている。「as」を辞書で引くと次のように載っている。

As: 如何ナレバ、故ニ、如ク、トキニ同ク、是ノ如
 (『英和對譯辭書』明治五年)

As:ゴトク、イカナレバ、ユエニ、ノトキニ、ス
ナハチ(『英和掌中字典』紀元二千五百三十三九
月、有馬私学校蔵板)

このように接続詞や助動詞として用いられ、意味も多
様である。単独では「くかの如く」の訳はない。

「くかの如く」は明治初期、中期にはそれ程流行しな
かったようである。明治中期の頃、泉鏡花の『化銀杏』
(明治二十九年二月・現代日本文学全集54による)には二
例みられる。

①お貞はしばらく黙したりき。良あり思出したらむ
かの如く、「旦那はく(二二頁下)

②とわツとばかりに泣出しさま、擲たれたらむかの
如く、障子とともにく(二九頁上)

明治後期に入ると用例がふえてくる傾向にある。翻訳
小説である『椿姫』(明治三五年八月)に六例が見られる。
そのうち三例を上げる。

③く、宛がら結構な美術作品が壊れて了ツたので、
もあるかの如く、深く彼の死去を悲しんだのであ
る。(『明治文学全集七 明治翻譯文学集』二七四
頁下)

④く永の年月互に思ひ合ツて居たかの如く思はれ

る。(三二六頁下)

⑤例の聞く度に自分の胸を貫くかの如く思はれた
咳聲も殆ど全く無かつた。(三三三二頁上)

ここで分かるように、動詞の連体形に疑問助詞「か」
が付いて連用形「の如く」と接続したものである。こう
した用法は明治後半によく用いられている。夏目漱石も
殆どの作品にその例が見られる。その使用度は次の通り
である。(出典は岩波書店『漱石全集』による)

★「用言連体形+か+の如く(に)」形:『吾輩は猫で
ある』三例、『坊っちゃん』一例、『野分』二例、
『虞美人草』一例、『坑夫』一例、『三四郎』一例、
『永日小品』一例、『それから』一例、『彼岸過迄』
二例、『行人』一例、『こゝろ』一例、『満韓ところ
く』一例、『明暗』一例。

そのうち何例かを取り上げてみる。

⑥當人も勉強家であるかの如く見せて居る。(『吾輩
は猫である』八頁)明治三八年一月

⑦「所が先生の方では、頭から僕にそれ丈の責任が
あるかの如く見做して仕舞つて、く(『虞美人草』
三五九頁)、四〇年六月

⑧く柔らかな梢の端が天に接く所は糠雨でぼかされ

たかの如くに霞んでゐる。『それから』三五二頁)、四二年六月

⑨ 始めて大きな眞理でも発見したかの如くに驚ろいた。『こゝろ』六四頁) 大正三年四月

⑩ 又は自衛的に慢ぶる神経の光を放つかの如くにも見えた。『明暗』三四頁) 大正五年五月

このように漱石の作品では初期から最後まで見られる。しかし時代が下るにつれ、「用言連体形+か+の如く」の形は少しずつ変化を見せてくる。次の例を見てみよう。

⑪ 無名の猫を友にして日月を送る江湖を處士であるかの如き感がある。『吾輩は猫である』二九一頁)

⑫ 路端の人はそれを何か不可思議のものであるかの如きに目送した。『彼岸過迄』一九三頁)

⑬ 恰かも荒縄で組み立てられたるかの感が起る。『それから』三三二頁)

このように、類似の表現形式として、「くかの如き」「くかのやうに」「くかの感」も現われてくるのである。連用形の「如く」と連体形の「如き」は明治後期に言文一致が進むことにより「やうに」と「やうな」に移り変

わっていく。特に「用言連体形+か+のやうに」形が多く用いられる。この表現は例えば森鷗外の『かのやうに』(明治四五年一月)において多く使用されている。

⑭ 併し點と線があるかのやうに考えなくてはくくあるかのやうにだね。くく元子から組み立ててあるかのやうに考へなくてはくくその無いものを有るかのやうに考へなくてはくく併し自由意志があるかのやうに考へなくてはくくそれでも絶對があるかのやうに考へている。『現代日本文學全集』一八八頁中、下筑摩書房)

時代が下るとさらに多くのバラエティが見られるようになる。『浮生六記』(昭和一三年)には以下のような例が見られる。

⑮ 朝日が窓に射しこむとすぐにはね起きて着物を着る様子はまるで人から呼び起こされでもしたかのやうであった。(二七頁)

⑯ 泉は三孔より成り、地の底からむくむく涌出しさながら沸き騰つてゐるかの如くである。(一七五頁)

右のように文末にくる用法で多様性が見られる。以上のように「用言連体形+か+の如く」の表現形式

は、既に近世末の英和辞書の翻訳文に見られる。この翻訳は漢文訓読調を用いているところから、もとは近世後期の漢文訓読体の中から生まれた可能性がある。現代では「用言連体形+か+のやうに」が主として用いられており、「用言連体形+か+のやうな」といった表現も見られる。この他に、ややかたい表現として「用言連体形+か+の如く」も用いられている。

五・おわりに

以上、近代における「ゴトシ」の新しい用法を漢文訓読の用法と欧文脈の用法とに分けて考察してきた。これまで述べてきたことは次の三つの点にまとめられる。

- ① 「則」字の読みの変遷により已然形の「ゴトケレバ」が用いられるようになったこと。この「ゴトケレバ」は、主として漢文訓読に用いられ、普通の文語文ではあまりみられない。

- ② 形容詞の「カリ活用」が新しく生まれたこと。「ごとく」にラ変動詞「あり」が付いた「ごとくあり」の縮約形である「ごとかり」が、文語文やそれに近い文章で用いられたことである。これにより命令形以外はすべての活用が備わった。

以上の①②の新しい用法は明治期に生成されたものではなく、近世後期の漢文訓読（一斎点・日尾点）の中に、用例が認められ、その影響が考えられる。しかし、「ゴトケレバ」と「カリ活用」は広く一般的に用いられたのではなく、極一部の資料にしか見られなくすぐ消滅した。

- ③ 翻訳調の用法である「用言連体形+か+の如く」の形式が、新しく用いられたこと。この形式は明治後期の文学作品の中で盛んに用いられた。これは江戸末の英和辞書の中に現われている。英和辞書の訳文は漢文訓読調で書かれており、江戸末の漢文訓読の文章の中で使われていたものが転用された可能性もある。

このように考えてみると、近代に現われた比況の助動詞「ゴトシ」の新しい用法は、江戸時代後期の漢文訓読を引き継いだものとみなすことができる。このことから近代の文章は文章史の視点から江戸の漢文訓読の影響を考慮すべきであるといえよう。

注

(1) 木坂基氏は樋口一葉の『たけくらべ』を調査した結果「やうなり」が「ごとし」を大きく上回ることから古代の和文脈と一致すると述べている。しかし、近代には樋口一葉のような特色はあまり見ら

れず、「ことし」が和文脈でも多用されている。(『近代文章成立の諸相』和泉書院一五七頁に所収)

(2) 『孟子講義』(明治十七年一月)は国立国会図書館蔵本であり、他の訓読資料はすべて東北大学図書館蔵本である。この『孟子講義』は本来の『孟子』からの内容を部分部分を選んで講義したもので、内容全部が収録されているのではない。

(3) 他に『言志後録』『言志晩録』『言志叢録』には「ゴトケレバ」の例がない。

(4) 「如し」が「則」につながる場合、どう読んだのか『論語』の版本(東北大学図書館蔵本)を通して江戸時代から通史的に見てみよう。例えば、○「夫如是則四方之民襁負其子而く」(子路第十三)の傍線部の読みを示すと、

一、「是ノ如クナラハ則」文之点 二、「是ノ如クナラハ。則」道春点 三、「是ノ如ナル寸ハ則」東涯点 四、「是如ナラハ。則」山崎嘉点 五、「是ノ如ナレハ。則」春台点 六、「是ノ如寸ハ。則」鈴木眼点 七、「是ノ如キハ。則」一斎点 八、「是ノ如ンハ。則」後藤点 九、「是ノ如キ寸ハ。則」日尾点 十、「是ノ如クナレハ。則」重田点

この『論語』の資料では「是ノ如ケレハ則」という読みは見られなかった。

(5) 数多い英会話書や英文典には「くかの如く」という表現は見られない。「くかの如く」は文学的表現であったため、使われなかったと思われる。これについてはもっと詳しく調べる必要がある。

参考文献

- (1) 岡本勲「明治文語の多様性」『國語學』一五一 一九八七年一月
- (2) 小林芳規「日本語の歴史中世」『国文学解釈と鑑賞』第三十四巻第十四号 一九六九年一月
- (3) 村上雅孝「近代における漢文訓読の流れ」『言語生活』二九一号 一九七五年一月

(4) 鈴木直治『中国語研究・学習双書中国語と漢文』光生館 一九七五年九月

(5) 齋藤文俊「近世における論語の訓読法の展開―条件表現による分類―」『訓読語と訓点学会』第七十七輯 一九八七年 訓点語学会篇 他に一斎点と関係ある論文は次のようなものがある。

齋藤文俊「江戸・明治期の漢文訓読と一斎点」『近代語研究第九集』武蔵野書院 一九九三年二月

齋藤文俊『四書』の「一斎点」について『日本語論研究2』古典日本語と辞書、和泉書院 一九九一年

(6) 五十嵐三郎「ことし(ことくなり・やうなり)く比況(古典語)」『松村明編古典語現代語助詞動詞詳説』学燈社 一九七〇年一月

(7) 松村明『日本文法大辞典』明治書院 一九七一年一月

付記

資料の調査にあたり、東北大学図書館の石田義光氏にご協力を得た。ここに感謝の意を表す。

、東北大学大学院生、